

データ教材集 第2集

拡大練習ワーク の

学習目的

「拡大練習」とは

外国語学習の練習手法のひとつで、
文の要素を1語ずつ増やしながらか、
文を少しずつ長くして行く方法

* 文作成のための練習方法

ことばのテーブル データ教材第2集 拡大練習ワーク

とは

外国語学習における拡大練習をヒントとして

少しずつ長くなる文(=拡大文)の

復唱と作文 を課題化した教材

拡大練習ワークの製作意図

子どもにとって、文がだんだん広がって行く、というのは興味深いことだと思います。

拡大練習ワークは、そのようなく文が広がって行く面白さを、子どもに感じてほしい、という意図で製作した教材です。

自分自身が、長い文を言えたり、作れたりできれば、それは、楽しく、また、ことばに対して自信を深める活動になると思います。

「文を拡げて行くこと」について

文を拡げて行く(長くつなげて行く)ためには、文法や文を構成する単語の知識が必要になります。しかし、子どもは、最初から正しい文を話せるわけではありません。多くの誤った文を発話しながら、少しずつ、正しい文を生み出せるようになっていきます。そのような習得の仕組みを支えるのは、より複雑なこと、多様なことを、何とか表現してみよう、という意欲です。誤りを恐れず、まずは、どんどん、ことばをつなげて行こう、というエネルギーが、文の産生を支えていると思います。

発達障害の子どもと文の学習①

発達障害の子どもにとって、長い文を作るのは、非常に難しい作業です。誤りを恐れずことばをつなげて行こう、とはいっても、文法力や語彙力の未熟さで、そのスタートラインに立てていない子どもも多くいます。

それらの子どもには、まずは、復唱という形で、文を口に上らせて欲しいと思います。そして、指導者の助けを借りながら、状況をイメージして、それを文にする課題に取り組んで欲しいと思います。

発達障害の子どもと文の学習②

たとえ自力で作った文ではなくとも、それを復唱や書字(もしくは音読)という形で、“自分の体を通す”ことが、文に対する気づきを高め、そして、心の中のイメージや気持を表現して行こう、という意欲を育てるのではないかと思います。

コミュニケーションとは、話せることを伝達することではなく、話したいことを伝達するものだ、ということに、子どもに気づいてほしいと考えています。

拡大練習ワークの学習目的

★拡大練習ワークは、以下の言語能力や認知能力、また他者との協調などが、求められる課題です。
課題の進みを通して、それらの能力や行動を育てることを目的としています。

- 聴覚的記銘力
- 注意能力
- 文のイメージ化
- 文法能力
- 協調的行動
- 言語調整能力

- 文の音読能力
- 文字表記能力
- 課題構造の理解
- カテゴリー概念
- 語想起能力
- 書字能力

I 復唱課題の学習目的

●聴覚的記銘力

聴覚的記銘力とは、聴覚的情報の記憶を指すものです。耳で聞いた内容を蓄える力は、拡大練習ワークの「復唱課題」で、もっとも必要とされるものです。

日常的なコミュニケーションでは、相手が話した文を理解するために、まずその文を記憶すること(=聴覚的記銘)が不可欠です。しかし、拡大練習ワークの復唱課題では、文を、認識・記憶するだけでなく、再生(発話)しなければなりません。そのためには、読み上げられた文を細部まで正確に記憶する力と意欲が求められます。

● 注意能力①

文を記憶するためには、まずその前段階として、記憶すべき対象に対して「注意」を向けなければなりません。

指導者の文の読み上げに際して、まず注意を焦点化（フォーカス）し、さらに、読み上げが終わるまで、注意を維持しなければなりません。舞台のスポットライトに例えれば、光りを当てるべき役者に向かってしっかりと構え、準備して、役者が登場すれば光りを点け、そして芝居が終わるまで、照準がぶれたり、光量を落とさないようにする。子どもにとっては、とても難しい活動と言えますが、課題のレベルを少しずつ上げながら、注意の能力を高めて行くことができればと思います。

● 注意能力②

復唱課題における「注意」は、音声（読み上げ文）に対してだけのものではありません。文が長くなり復唱が難しくなってくると、指導者は援助として、身振りや指さしを加えますが、子どもは、それらに対しても注意を向け、活用しなければなりません。

音声にも注意しながら、身振りや指さしにも気を配る、というのは、同時処理（ワーキングメモリー）の能力を求められる活動です。援助を付加した場面での復唱課題は、複数の事柄に注意を向ける機会になると考えています。

●文のイメージ化

復唱課題における、文の記憶と再生は、記銘力や注意力だけが担うものではありません。その文の意味を理解し、状況をイメージできることが、記憶・再生を促します

文の内容を正しくイメージできるためには、当然ですが、文の理解が必要で、後述する文法力や語彙力が不可欠です。しかし、文法や語彙に未熟さがある子どもにとって、いきなり長い文を理解し、イメージすることは困難です。

「飲んだ」「ジュースを飲んだ」「おかあさんがジュースを飲んだ」・・・のように1単語ずつ増えて行く拡大文の練習は、イメージもまた、少しずつ拡大させて行く活動です。絵を少しずつ描き足して行くように、イメージを広げる練習になればと思います。

● 文法能力①

拡大練習ワークは復唱・作成両課題とも、文の仕組みと助詞に触れる、という学習目的があります。

復唱課題においては、「拡大文を聞き、復唱し、さらに音読する」という活動を通じて、動作主や目的語、形容詞、副詞、といった文の要素や語順に対する気づきを深めます。

また助詞は、日本語の文の意味を決定するもっとも重要な文法です。しかし、それ自体は意味を持たず、加えて、1音節で聞き逃しやすい助詞は、発達障害の子どもにとって習得が極めて難しいものです。文の再生(復唱)を達成するために、まずは、助詞に対する注意を高めてほしいと思います。

● 文法能力②

役割交代して、指導者が復唱をする場合、もしそこに誤り(エラー)があれば、子どもは、それを訂正してあげなければなりません。(※エラーは指導者がわざと行います)

「リンゴ」が「ミカン」になっていた、というようなエラーは、子どもにとっても気づきやすく、直しやすいものですが、助詞や助動詞、活用語尾などの文法的誤り(例:「リンゴを」→「リンゴが」)は、気づかずスルーしてしまったり、間違えていることには気づいても、どのように間違えたかまではわからない、ということが多くあります。

助詞を始めとした機能語に対する注目は、日本語に対する感受性を高めて行きます。文の相違や文法的誤りに対して〈どこか変・・〉と、まず感じられるようになってほしいと思います。

● 協調的行動

役割を交替し、子どもが先生役となって文を読み上げる課題では、相手（指導者）との協調が大切になります。

相手の復唱が終わってから次の文を読む、復唱が正しくできていたかを相手に伝える（相手からの「合ってた？」などの問いに対して返答する）、などの行為は、話者交代などの会話ルールに通底するものです。

とくに先生役という、相手を主導する立場に立つ場合、他者との協調は、いっそう重要になります。自分のことだけでなく、相手の様子や、自分と相手との関係に気を配りながら、課題を円滑に進められるようになってほしいと思います。

● 言語調整能力の育成

協調的行動とともに、必要とされるのが、ことばによる調整能力です。役割交替し、指導者が復唱する課題では、先生役の子どもは、復唱内容に注意を払いながら、その可否について判断を下し、必要があれば相手に訂正を求めなければなりません。

復唱が正しくなされていた場合は、「あってた？」という指導者からの確認の問いに対して、「OK！」や「いいよ」などの**肯定表現**を返すことが必要です。

逆に復唱に誤りがあった場合（※指導者が故意に間違えているのですが）、まず「ちがう」とはっきりと**否定**をし、さらに「AじゃなくてBだよ」などの**訂正表現**をすることが、求められます。

● 文の音読能力①

復唱課題で、役割交替をして、子どもが文を読み上げる場面では、文を音読する力が必要になります。

子どもは、相手の復唱のために、文を正確に読むことが求められます。子どもが、自分の音読の役割を理解し、他者のために正確に読もうとする行動が、注意深い読みを育て、また、自分の行動に対する責任性を高めると考えています。

● 文の音読能力②

復唱課題で役割交替して、子どもが文の読み上げを行う場合、一度、自分が覚え、口にした(復唱した)ものを読むことになります。その場合、文の内容の記憶の助けもあって、初見の文よりも、読みはスムーズになります。

また、拡大文の場合、単語が1語ずつ増えて行くので、同じ語を何度も繰り返すことになり、その点でも、長い文を無理なく読んで行くことができます。

長い文を独力で読み下せた、という経験は、子どもにとって大きな自信になるものと思います。

●文字表記能力

同じ文を、聴く・話す・読む、書く(*文の作成課題で取り組みます)という、複数のモダリティー(回路)で体験することは、文字の表記の習得に効果的と考えられます。(⇒参考資料「音読の学習と工夫」参照)

〈さっき聞き、口にした文は、こんなふう書いてあったんだ・・・〉と気づき、そのイメージを思い出しながら、今度はそれを自分で読む。ひとつの文に繰り返し触れることが、表記の理解・定着につながって行くと考えています。

● 課題構造および役割の理解

復唱課題での役割交代が、よく理解されていない子どもは、指導者が行った復唱に対して、また自分が復唱してしまったり、相手の復唱を待たずにつぎつぎに文を読んではしまったりします。第1集「つたえる練習」と同様に、この拡大練習ワークの大切な学習目的として、ロールプレイの課題構造と自分の役割の理解があります。

発達障害の有無に限らず、子どもは学習に対して受身になりがちです。自分が相手を先導し、ときには内容の誤りを指導する、という役割練習を通して、学習に対する能動的な取り組みや、客観的視点を育てて行くことができると考えています。「今度はわたしが、先生だ！」と、自分を意識できるようになってほしいと思います。

Ⅱ 作成課題の学習目的

● カテゴリー概念の育成

文の作成課題は、独力では長い文を作ることが難しい子どもを対象とした課題です。そのため文作りに当たっては、指導者のさまざまな援助が必要になります。その中で、主要な援助となるのが、5W1H(いつ・どこ・だれ・なに等)に当たるカテゴリーを示して、それぞれに対応する単語を想起させる、という方法です。

最初に提示してある述語の動詞と結びつく語を空欄に入れて行くわけですが、「ここは、“だれが”にしたら？」「“何を”を入れてみよう」のように、文の動作主や目的語、時間、場所などのカテゴリーを示して、単語を想起させます。(だれ＝人⇒お父さん・先生・・、どこ＝場所⇒公園・学校・・など) 文の中での有機的なつながりを考えながら、カテゴリーに対応する単語を考えて行くことが、カテゴリー概念そのものの育成に効果的だと考えています。

● 語想起能力

「カテゴリー概念」で触れた5W1Hの援助が与えられても、それぞれの概念に対応する単語が想起できなければ、文が作れません。また、その単語は、文の要となる述語と関連するものを選ばなければなりません。

(例:「食べる」 “何を” = 食べ物 → リンゴ、ごはんetc
“だれが” = 人 → パパ、お兄ちゃんetc)

(例:「咲いた」 “何が” = 花 → タンポポ、バラetc “どこで” = 場所 → 庭、公園etc * でも「海」は不適切)

「カテゴリー × 文の内容との整合性」というクロス条件で単語を検索・想起する活動が、日常コミュニケーションにおける実用的な語想起につながると考えています。

● 文のイメージ化

復唱課題とは異なり、文の作成課題では、自分で状況を思い描いて行く力が必要になります。とは言え、子どもは最初、指導者が求めるカテゴリーの単語を、ただ挙げているだけ、のことが多いと思います。「何を？」と問われて「アイス」と言い、「だれが？」と問われて「お母さん」を挙げる、というように、拡大文を作る過程では、イメージは湧いていないかもしれません。しかし、出来上がった文には、一つの状況が生まれています。子どもが自分の作った文を読んだ時に、イメージが浮かんで来るようになってほしい、というのが、このワークの大切な目的のひとつです。そして、少しずつ、自分の力で、イメージを拡げて行けるようになってほしいと思っています。

● 文法能力

文を作る場合、どうしても必要となるのが文法です。単語は援助を受けて想起できても、文法を支える助詞などの機能語は、浮かばない、また間違えてしまう、という子どもが多いと思います。機能語は援助されれば想起できるというものではないので、指導者が教えれば良いと思います。また、助詞などを間違えて使用している場合は、その場で訂正し正しいものを教える必要があります。

この課題の文法学習において、いちばん大切なのは、助詞に対する気づき、だと考えています。間違えてもいいから、主語や目的語のあとには必ず助詞を付けて、その存在に対する注目を促したいと考えます。

●書字能力

想起した単語をマス目に書き入れて文を作っていくわけですが、A4～B4程度に用紙を拡大しても、単語の書き入れに苦勞する子どもが多くいます。

その場合、文字を小さく書けない、という理由ではなく、小さく書けるにも関わらず、スペースに対する文字の配分ができずに、失敗する子どもが多いように思われます。

「文の作成課題」の場合は、単語を書き入れるマス目の大きさはすべて同じです。「おかあさん」と「ネコ」を書く場合は、文字数から考えて、それなりの文字の大きさを考慮しなければなりません。マス目への単語の書き入れを通して、文字と空間との関係に気づき、書字にたいするプランを持つようになってほしいと思います。

文は、つなげて行こうとすれば、無限に広げて行くことができる、不思議な存在です。

子どもに、その不思議さと面白さを、感じてほしいと思っています。

楽しく練習しながら、いろいろな学習を進めていただければ幸いです。

